

若年層日本語母語話者のくだけた会話に現れた

技巧の分析—日本語教育の立場から—

石川 朋子

要旨

本稿は若年層日本語母語話者のくだけた会話に現れた技巧を分析し、その結果を日本語教育に役立てることを目指すものである。本稿で言う会話の技巧とは、母語話者が相手に与える印象を調整するために行う言語表現上の操作である。因（2005 他）は、フィクションの作品中にそれらを数多く観察している。しかし、中級教科書ではそうした事象に殆ど触れられていない。そこで本稿では、親しい関係にある若年層日本語母語話者の大学生及び大学院生のくだけた会話を観察した。その結果、「丁寧度の上昇によって談話の場を変える」「自分とは違う人格を演出して特定の意図を示す」「粗野な表現を使用して親密さを確認する」「特定の型にそって攻撃的な発話を行う」などの技巧の存在が認められた。くだけた会話を行う必要のある学習者には、こうした技巧についての理解を進めることが必要であると考えられる。

キーワード：くだけた会話 若年層日本語母語話者 会話の技巧
F T A 「他人格モード」

1. はじめに

本稿は若年層日本語母語話者のくだけた会話に現れた技巧を分析し、その結果を日本語教育に役立てることを目指すものである。本稿における「くだけた会話」とは、非公式な場で普通体を基調として行われる雑談や情報交換を指す。本稿の観察対象者は、大学・大学院で学ぶ親しい関係にある 18 歳から 20 歳代後半までの若年層の日本語母語話者（以下、母語話者）である。

従来の日本語教育においては、一般的に、くだけた会話に関する教育にはあまり注意が払われてこなかった。どこでも誰にでも無難に使える丁寧体基調の会話の学習をくだけた会話の学習に優先させることは理に適ったことであり、学習時間が限られている場合、その傾向は

一層強まる。このような状況下で、くだけた会話の学習は学習者の自発性に任されることも多く、母語話者の友人と慣れ親しんでいくうちに自然にくだけた会話のやり方を身に付けていくことが期待されるように思われる。しかし、先行研究を見ると、くだけた会話の教育に対する姿勢を考え直した方がいいと感じさせられる事例も多く見受けられる。

石川（2005）は、韓国人日本語学習者によるくだけた会話を分析した結果、疑問を表す「普通形+か」や不適切なジェンダー標示形式の使用、言い切りの多用等が母語話者に強い違和感を与えることを報告し、くだけた会話に関する明示的な指導の必要性を示唆した。

横田（1991）は、日本の大学で学ぶ留学生が日本人学生との親密化を妨げる要因として「日本人学生の会話は個人の意見や主張が希薄でおもしろくない」という要因を挙げたと報告している。同様に、日本在住の留学生に対し対人関係を形成・維持する際の行動上の困難を調査した田中・藤原（1992）も、「日本人は自分の意見を言わない」「嫌だと思ふことを言わない」といった留学生の指摘があったと報告している。一方、留学生と交流した経験を持つ日本人短期大学生にアンケートを実施した梶原（2003）には、日本人学生が「留学生の話は「直接的な表現や自己主張が強くて少し怖い」と回答したとある。これらの報告から、留学生が「日本人ははっきりと物を言わない」と感じている反面、日本人は「留学生は直接的な物言いをする」と感じていることが分かる。なぜこのような相違が生じるのであろうか。その理由を考える上で因（2002）の指摘がひとつの示唆を与える。因（前出）は、日本語上級コースの学習者が「日本人の発話の一応の意味は理解できるが真意が分かりにくい場合が多々ある」と述べたことを受けて「間接性や言葉のあやを含む言語表現、発話意図を推定する手がかりとなる表現上の特徴などについては、理解上の問題が少なからず存在し、学習者は手がかりを見落としているのではないだろうか」と述べている。この指摘に鑑みると、学習者は母語話者が意見を主張するといった場面で露骨になることを避けるために使用する様々な表現上の操作に注意を向けていない可能性があると考えられる。そのため、母語話者が自分の意見を述べたとしても、その述べ方が間接的であるため、学習者はその真意を取り損ねてしまうのではないだろうか。また反対に、学習者が発信する際には、母語話者のような和らげた表現方法を取らないため、母語話者にとって「はっきりしすぎている」と感じら

れる話し方をしてしまうのかもしれない。留学生と日本人学生の互いの物言いに対する印象に食い違いが生じ親密化が進まないという事態の裏に、こうした事情が潜んでいる可能性が考えられる。

学習者が母語話者の真意を理解できるようになるためにも、また、母語話者に否定的な印象を持たれないためにも、母語話者がくだけた会話をどのように行っているのかを学習者に提示する必要があるだろう。学習者が母語話者と同じ話し方をする必要は全くないが、母語話者が何を行っているか、また、違うやり方をした場合にどんなリスクが生じるかを彼らに知らせておく必要はある。

本稿では、母語話者が相手に与える印象を調整するために行う言語表現上の操作を「会話の技巧」と呼ぶ。技巧にはレベル・方言・ジェンダー標示形式・特定の職業、年齢層に特有な物言いといった文体的マーカーの意識的な操作や、決まり文句・特定の冗談の言い方といった定型的なやりとりの使用が含まれる。会話の技巧は、どのような世代のどの会話にも現れるものだが、本稿は若年層母語話者のくだけた会話を観察対象とする。くだけた会話、とりわけ若者同士の会話では、ざっくばらんで直接的な物言いをして問題はないと思われるがちであるが、実際はそうではなく、上述の梶原(2003)にあったように、日本人学生の中にも留学生の直接的な話し方に違和感を持つ者もいる。社会人として知り合った者同士なら親しくなっても丁寧体基調の会話を続けることもあるが、若い時分に学生として知り合った場合は普通体基調で話すことが多いことを考えると、特に若年層の学習者にとって、くだけた会話の方法を学ぶ必要性が高いと言えよう。

会話に現れる技巧は日本語以外の言語にも存在し、その動機となる心理には共通性が認められる。一方、技巧の手段・方法となると、各言語に個別的なものも多い。母語話者がそれを共通認識として共有していることを考えると、「学習者も母語話者が持つ共通認識を理解する必要」(鈴木 2007)があり、日本語教育においてはその共通認識を明示的に提示することが必要となろう。

くだけた会話の教育のための基礎研究は現時点で十分になされているとは言い難い。まずは母語話者の実態を調査して様々なサンプルを収集し、提示可能な形にする必要がある。そこで本稿では若年層の母語話者によるくだけた会話を採取し、どのような技巧が使われているかを観察してその記述を試みる。以下、2節では「会話の技巧」に関する先行研究をまとめる。3節では中級レベルの教科書においてくだ

けた会話がどのように扱われているかを探る。4 節ではデータの概要とサンプル抽出方法について述べ、5 節では若年層母語話者のくだけた会話に現れた技巧例を検討する。6 節では本稿のまとめを行い、今後の課題を述べる。

2. 研究の背景

因（2005 a、2005 b、2006 他）は、一連の研究において小説やマンガ等の会話に現れた技巧を取り上げ、ジェンダー標示形式やレベル等をはじめとする認知的意味を持たない文体的マーカーの操作によって有標の表現であることが示され、それによって引き起こされた推論の結果、種々の意味が産出されることを示している。ジェンダー標示形式を用いた例としては、「話者の性とは一致しないジェンダー標示形式を用いて滑稽味を演出したり、深刻さや気まずさを和らげたり、自己防衛したりする」「男性話者が同性と話す際には男性的な話し方、女性と話す際には中性的な話し方を用いることによって相手への協調を示す」「女性話者が殊更に女性的な話し方をするによって強い攻撃的意図を示す」といった例が挙げられている。またレベルに関する例としては、「普通体基調の会話で丁寧体を使用することによって場を意図的に変化させる」「相手からの接近に比べそれまで用いていた丁寧体から普通体による発話に切り替えて心的距離を縮める」というような話者の態度についての明瞭なメッセージを伝える例が挙げられている。因はこうした認知的な意味に変化をもたらさないマーカーの操作によって産出される意味の解釈は上級レベルの学習者にとっても困難であることを指摘し、日本人との接触経験の長さによってその困難が軽減される可能性は少ないと述べている。

因がフィクションの中に観察している種々の現象は直観的には我々の日常の言語表現の中にもよく見られるものだと感じられる。こうした技巧が学習者にとって理解が困難であるという指摘にも説得力がある。しかしながら、こうした技巧が現実の母語話者によって用いられているかどうかは明らかになっていない。それを確かめるには母語話者の会話資料を観察することが必須であると考えられる。

3. 日本語中級教科書におけるくだけた会話の扱い

次節以降で母語話者のくだけた会話を検討するが、その前に本節では、サバイバルを越える会話能力の育成を目標としている中級教科書

において、くだけた会話がどのように扱われているか検討したい。これらの教科書はいずれも広く使用されており、学習者が手にする可能性が高いと考えられる。

- ・ 『日本語会話中級 I 』（1993）（以下『中級 I 』と略す）
- ・ *AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE* （1994）（以下『APPROACH』）
- ・ 『ロールプレイで学ぶ 中級から上級への日本語会話』（2000）（以下『ロールプレイ』）
- ・ 『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』（2004）（以下『生中継』）

『中級 I 』では、くだけた会話が友人同士や夫婦の会話として数多く提示されているが、その扱いは内容把握や文型・表現の確認に終始している。くだけた会話に関しては「くだけた形は「～です／ます」のつかない形です。親しい人と話すとき使います」（p. 5）という説明と丁寧体を普通体に変換する練習（p. 5）及びくだけた形の練習（pp. 6-7）があるのみである。また、友人同士の会話でも丁寧体基調のものと普通体基調のものがあり、その違いについての説明はない。次のような普通体基調の会話における丁寧体の使用には「相手を心理的に突き放す」という効果があるが、これに関して何の言及もないのは残念である。

妻： 夕ごはん、家で食べるって言ったじゃない。
夫： ごめん。急に課長に誘われちゃって。
妻： ずっと食べないで待ってたのよ。
夫： ごめん！じゃ、お茶、飲もうよ。ね、ぼくお湯わかすから。
妻： もう、わいてます。
夫： あ、そう。じゃ、ぼくお茶入れるよ。紅茶がいい？日本茶？
妻： もう入ってます。 (pp. 116-117 下線は筆者)

「中級レベルの学生の聞・話・読・書の四技能を並行的に伸ばす」ことを目標とした『APPROACH』においては、くだけた会話は友人同士の会話に一貫して用いられている。また、ホストファミリーの両親が留学生と話す場合にも常に普通体が用いられている。運用練習におい

ては、くだけた日本語やジェンダー標示形式を使うようにという指示が見られ (pp. 46, 66, 90 他)、くだけた会話の教育に対する配慮が意図的になされている。ただ、提示される会話に文体的マーカーによって特定の意味が付加されるような発話は一切含まれていない。

「タスク先行型」のロールプレイを通して会話の練習をするという『ロールプレイ』でも、くだけた会話は友人同士の会話例として多く提示されている。しかし、会話中に提示されるジェンダー標示形式は機械的に使用されているだけで、文脈において特定の意味が産出される例は紹介されていない。

くだけた表現に慣れていない学習者を対象者の一部としている『生中継』は、「話された情報を正確に理解するだけでなく、話し手の意図や感情も正しく理解できるような「聞く」練習」(p. 3)がある点で画期的である。しかし、その「聞く」練習が「語り」及び単文の形でのみ提示されており、会話のやり取りの中でこそ効果を発揮する技巧については言及がない。また、文句を言う場面で「日本語では、親しい間柄を除いては、相手に直接的に文句を言うことは少ないです」(p. 63)という記述があるが、これだと“それなら、親しい間柄なら直接的に言ってもいいのだ”と学習者が誤解する恐れがある。

因(2002)は研究留学生に対してニーズ調査を行い、学習者は「研究生活に対応するための明解な情報交換型の活動における発話力だけでなく、社会儀礼に則った表現や潜在的に危険度の高い言語行動を行うための表現など社会文化的知識を基盤にした発話力の向上」を求めていると述べている。しかし、中級の教科書を見ると、そこに提示されているくだけた会話は文字通りの意味が取れば問題が生じないものが圧倒的に多く、成人の会話に必ずあるはずの微妙な表現や、推論により算定する必要のある意味を含む発信は殆どない。

4. 使用データ概要及びサンプル抽出方法

本節と次節では、母語話者がくだけた会話において印象調整のための技巧を用いているかどうかを、母語話者が自発的に行った会話をサンプルとして観察する。サンプルの採取にあたっては、下のよう会話の大まかな方向について虚構的な状況を指定したが、会話参加者のアイデンティティは現実の通りであり、また、具体的内容は会話参加者の自由に任せた。従って、自発的会話として扱うことが可能と考えられる。

採取時期は 2004 年 3 月から 2007 年 7 月、対象者は 18 歳から 20 歳代後半の友人関係にある母語話者の大学生及び大学院生（男性 9 名、女性 48 名）である。81 例（総時間約 160 分）の会話を録音し、宇佐美（2006）を参考に文字化した。

会話の状況として指定したのは「友人を英会話学校に誘う」「隣室でパーティーをしている友人に苦情を言う」「週末に見た映画の感想を述べ合う」の 3 つで、どこの英会話学校を想定するか、何を理由としてあげるか、何の映画を想定するか等、細かい設定は全て参加者の創意による。各話題につき 27 の会話例を得た。

分析に際しては、2 節で述べた因の研究を参考に、ジェンダー標示形式・レベルといった文体的マーカーや冗談など、有標性があるとされる表現の使用を中心に会話を観察し、そこに現れた技巧を抜き出した。

5. 若年層母語話者のくだけた会話に現れた技巧

5.1 丁寧度の上昇による談話の場の変換表示

(1) は一人の女子大生がもう一人の女子大生を英会話学校へ行こうと誘っている場面である。ここでは話者が発話の丁寧度を上げることによって談話の局面の変化への意図を示そうとする様子が見られる。

(1)

- 1 F1: ねえ F2 ちゃん、英会話学校行きたいと思うんだけど、一緒行こー。
- 2 F2: 英会話学校？んー、いつから行く予定？
- 3 F1: 夏休み。
- 4 F2: 夏休み。んー、どうしよー。ちょっと夏休みは用事があるんだけど。
- 5 F1: じゃ週末だけ。週末だけでもいいから一緒行こー。
- 6 F2: 週末？んー、週末アルバイト入れちゃってるからー。
- 7 F1: じゃあアルバイトが終わった後とか、アルバイトが始まる前とかでもいいから、一緒行こー。
- 8 F2: んー、ちょっと難しいなあ。んー、ちょっと考えてみようかなあ。
- 9 F1: うん、分かった。じゃあ返事待ってます。
- 10 F2: うん、分かった。じゃ考えとくね。

11F1: はい。

二人の女子大生は普通体基調で話しているのだが、下線部のところでF1（Fは女性話者を指す。以下同）は「返事待ってます」と丁寧体を用いてそれまでの会話の雰囲気とは違うフォーマルな場を作り出している。このようなレベル変化は何らかの意図の存在を暗示する。ここでは「返事を待つ」という発話内容と相まって会話終結への意図を示唆していると考えられる。F2はその意図を察知してそれ以上会話を続けることはせず、会話の終結にふさわしい対応をしている。

5.2 別人格の明示

(2) は部屋が隣同士の友人の会話で、夜中に一方がパーティーを始めてうるさいのもう一方が文句を言いに来た場面である。この例では女子大生が本来の彼女の話し方とは思えない話し方を次々と繰り出している点が注目される。

(2) F4は子どものときからいつも夜遅くまで起きていたという話の後で…

- 1 F3: 分かった。じゃあね、①君が夜行性なのは分かったのだがね、
- 2 F4: うん、だからしょうがないじゃん。
- 3 F3: いやでもさ、ほんとやめてよ。②今日ばかりは勘弁してください。この通りです。〔手を合わせて拝む〕
- 4 F4: じゃ、これから全部ボディランゲージで話そうか？
- 5 F3: ③もう、うざーい。ボディランゲージでずっと話すのとか無理だし。

F3はまず①で年配の男性を思わせる話し方をし、次に②でまるでお殿様に請願している家来のように振る舞い、最後に「もう、うざーい。ボディランゲージでずっと話すのとか無理だし」と女子大生である彼女に最も普通（無標）と思われる話し方をしている。これらの発話はいずれも相手に苦情を言うというFTA（face threatening acts, Brown & Levinson 1987）を行うものであるが、①、②の場合は、女子大生としては有標と思われる表現を用いることによってユーモラスな感じが醸し出されており、FTAを緩和しようとするF3の意図が感じら

れる。しかし、③において、F3 は彼女の素の話し方をしており、FTA を緩和しようとする配慮は示していない。母語話者であれば、この変化から F3 は今や本気を出しているのだということを理解し、これ以上冗談まじりで交渉し続ける余地はなく、彼女の要求を容れるか決裂するかのどちらかしかなくなったことを知るであろう。もし、F4 が学習者で、この文体の変化に気付かずそれまでと同じようなのりくらりとした対応を続けたとしたら、F3 はこの暫く後に大爆発を起こしてしまうかもしれない。学習者から「日本人は突然怒る」という訴えを聞くことがあるが、もしかしたら③における変化のような前触れを見落としているのかもしれない。

F3 は、明らかに彼女本来の人格とは異なる年配男性や家来のような文体を採用して滑稽味を出すことによって、相手にとって受け入れ難いであろう要求を和らげつつ行おうとしている。因はこのような技巧を「他人格モード」と呼んで、「話者がわざと自分のアイデンティティが指定するものではない文体的形式を用いて一時的に自分でない誰かのふりをすること、即ち、意図的で明示的なアイデンティティの偽装」(因 2006) と定義し、「文体による冗談」の技法であると述べている。

次の(3)では、文体による冗談と内容による冗談とが両方用いられている。内容だけでも滑稽味は出るだろうが、話者のアイデンティティから逸脱した文体の使用によって滑稽味が一層際立っている。

(3) (2)と同じ状況。

- 1 F3: だからさ、とりあえず何時ぐらいまで騒ぐ気なの？一晩中騒ぐとか言ったらどうなるか分かってる？
- 2 F4: いや、ちょっと6時ぐらいまで。
- 3 F3: 一晩中じゃん。
- 4 F4: え、ぎりぎり暗い…、あー、もう夏だから無理か。
- 5 F3: 夏だからもう夜が明けてるよ。
- 6 F4: んー。そろそろ冬になるって。
- 7 F3: も一何で一晩中…、あ、もしかして昼寝とかした？
- 8 F4: うん。
- 9 F3: 最悪違う？あたし昼寝してないのに。
- 10 F4: 18時に起きて、それから始めた。
- 11 F3: もー、1人だけ学生するなよ。

12F4: [笑い]

互いに学生であるのに「学生するなよ」と言うのは、内容の上からも冗談であると分かるが、「しないでよ」ではなく「するなよ」という女子大生にとって無標とは言い難い言い方をすることによって、この発話が冗談であることがよりはっきりする。それがF4にも理解されたことは、F4が笑いによって対応していることから明らかである。

F3は、F4の騒音に文句を言うというFTAを行っているのであるが、親しい相手であるにもかかわらず様々な緩和策を取っている。「学生するなよ」というこの男性的表現は、ここでは「剥き出しの乱暴さ」を示しているのではなく、他人格モードによる「冗談」、或いは、次項で触れる「粗野な表現による親密度の確認」と解釈でき、いずれにしろFTAの緩和のために用いられている。しかし、もし学習者がこのような発話をされた場合に、単純に乱暴な言い方だと解釈したら、話者の意図に反して激しい攻撃性があるように思ってしまうかもしれない。

5.3 粗野な表現の使用による親密度の確認

次の(4)は二人の女子大生が食堂で偶然出会った際の会話である。二人が「食う」という粗野な語彙を繰り返し用いている点が注目される。

(4)

1 F3: あ、[F4]さんやん。

2 F4: ん、あ、[F3]さん、何食ってんの？

3 F3: アイス食ってるよ。

4 F4: んー。

5 F3: おいしい、これ。

6 F4: あー、おいしそうだねー。何か、みんな絶対ソフトクリーム食うし。

7 F3: うん、みんなソフトクリーム。

8 F4: はまったね。

最近男女の表現に差が少なくなっているとはいえ（尾崎 1997、中島 1997、三宅 2004 他）、「実際のコミュニケーションでは、大学生くらい

の若者にも、男女差が依然としてある」（小川 2006）ようだ。若年層の女性が粗野な表現を使う場面に以前より頻繁に遭遇するようになったが、彼女たちはどこでもかしこでもそうした表現を使っているわけではなく、ある特定の意図を持って使いたいところで使っていると考えられる。その「使いたいところ」のひとつは、仲間意識を表す場面であろう（Brown & Levinson 1987）。F 4の「食う」の使用は、「上品ぶった人たちとは違うウチら」という内輪意識を示していると考えられ、F 3も、同じ語彙を繰り返すことにより自分に示された内輪意識に応え、それを強化している。そもそも「何を食べているか」は見れば分かるわけで、F 4がF 3に対して発したこの質問の要諦は「食う」の使用であったとも言える。F 3も、ただ答えるためなら「アイスよ」とでも言えば足るのにわざわざ動詞「食う」を繰り返している。このように、相手への同調を積極的に行うのは、くだけた会話における代表的なポジティブ・ポライトネス・ストラテジーであると考えられる。

次の例（5）には、内輪意識を強調する粗野な表現の使用、同調、有標の語彙の使用、攻撃性の殊更な強調など、さまざまな技巧が観察できる。

（5）（3）の直後の会話。

- 1 F 3 : もー、最悪。現代人これだから嫌だよ。
2 F 4 : [笑い]現代人？あ、そんな古風だった？[F 3]さん。
3 F 3 : うん、そうだよ。
4 F 4 : そうだっけ？しょうがねーなー。
5 F 3 : 6時に起きて9時に寝る。
6 F 4 : [笑い]すげー。そりゃすげー。
7 F 3 : すげーだろ。
8 F 4 : うん。
9 F 3 : すげー。

まず、「しょうがねー」「すげー」などの粗野な語彙が使用されている。また、F 4の「しょうがねーなー」は相手を非難する発話を殊更に粗野な形式で行うことによって攻撃性を極大化し、そのことによって逆に本気ではなく冗談であることを示している。このどちらの場合も、その発話を受けた方がぴったりと相手の滑稽味への同調を見せて

いることが注目される。「すげー」には、「すげーだろ」と受けており、「しょうがねーな」に対しては、真面目すぎて「しょうがない」自分の生活ぶりを明示する「6 時におきて 9 時に寝る」という発話で応じている。

さらに、「現代人」「古風」といった評論家のような語彙は、このような会話においては無標とは言えず、滑稽味を出している。

かつては男性用の表現だった「食う」や「すげー」といった表現を今は女性も使っているわけであるが、これは男性的表現の使用範囲が広がってきた結果と言える。こうした表現は全く無標の使用語彙の一部となっているのではなく、特定の意図や雰囲気を出すために使われていると考えられる（因 2003）。今回筆者が採取したデータにも女性による男性的表現の使用は頻繁に現れており、特に若年層の女性によるくだけた会話ではその傾向が顕著であることが示唆される。

5.4. 攻撃性の明示

(6) は故意に攻撃的な内容の発話を行い、それを冗談として機能させている例である。M1（Mは男性話者を指す。以下同）とM2は男子大学生で、二人は好きな映画について話している。

(6)

- 1 M1: また一緒に見ようよ。
- 2 M2: 一緒に？
- 3 M1: うん。
- 4 M2: いや、あんま見たくない。
- 5 M1: [笑い]

もし本当に一緒に映画を見たくないのであれば、いくら親しい間柄でも友人関係を維持する意思があるならば、M2ははっきりと「見たくない」とは言わず、2行目のところで「うん」とか「そうだね」と適当に返事をするであろう。「一緒に映画を見たくない」というM2の発話の本気ではないことをM1が理解していることは、「笑い」という対応を見せていることから分かる。

ここで重要なことは、「見たくない」というパンチラインが繰り出されるために、一定の型とも言える手続きが踏まれていることである。M2は「一緒に？」と聞き返し殊更に注目を引きつけた上で、一挙に

落としている。もしM2がこの準備段階を踏まずに2行目で「いや、あんま見たくない」と発話したとすれば、その発話の非友好性はかなり強くなり、これを冗談と取るのは難しくなるだろう。一見ずけずけとしたとした物言いをし、会話に面白みを持たせるといふ話し方は今回のデータに数多く見られ、若者に特徴的な話し方だと考えられるが、無雑作にではなく、一定の型を踏襲していることが認められる。このような「型」は、テレビタレントによってよく用いられているようでその影響もあるのかもしれない。

6. まとめ及び今後の課題

友人関係にある若年層の母語話者大学生及び大学院生のくだけた会話を分析した結果、ざっくばらんな物言いが主流だと思われがちな若者のくだけた会話において、因がフィクションの中に観察したような、文体の変化や語彙の選択、一定の型などを用いた技巧が頻繁に使われており、また、それらの技巧には同調という対応が見られることが観察された。くだけた会話は、親しい間柄で行われるものであるが、直接的な表現ばかりで構成されているのではないと言える。

因(2004b、2005a)では学習者がマンガ中の会話に現れた技巧に関して母語話者とはかなり異なる解釈をしたことが報告されているが、今回の実際の会話に現れた技巧に対して彼らはどのような解釈をするだろうか。因の行った解釈テストは、絵という視覚資料と文字によるものであるが、学習者の解釈の実態を知るためには、少なくとも音声、できれば、会話の映像と音声を用いて調査を行う必要があると考える。

小矢野(2007)に「日本語の運用能力がきわめて高度な学習者であり、日本語で専門分野の論文を書き、学会発表を行うレベルの人であっても、学友との会話がいつもデス・マス体のままであることがある。日本語母語話者にとっては、外国人であるということを前提にしても、他人行儀な言葉遣いだと感じる」という記述があるが、このような状態のままでは学習者と母語話者との更なる人間関係の発展は望みにくい。学習者が母語話者と良好な人間関係を築くためにもくだけた会話を適切に管理できることは重要であり、そのための基礎的な研究の積み上げは急務であると考えられる。

参考文献

- 石川朋子 (2005) 「韓国人日本語学習者によるくだけた会話の問題点について」『比較社会文化研究』17号、pp. 117-122
- 宇佐美まゆみ (編) (2006) 『言語情報学研究報告 13 自然会話分析への言語社会心理学的アプローチ』東京外国語大学大学院地域文化研究科 21 世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
- 小川早百合 (2006) 「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識—日本語教育での活用に向けて—」『日本語とジェンダー』ひつじ書房、pp. 39-51
- 尾崎喜光 (1997) 「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』ひつじ書房、pp. 33-58
- 梶原綾乃 (2003) 「留学生と日本人学生の交流促進を目的としたコミュニケーション教育の実践」『日本語教育』117号、pp. 93-102
- 小矢野哲夫 (2007) 「若者ことばと日本語教育」『日本語教育』134号、pp. 38-47
- 楢本総子・宮谷敦美 (2004) 『聞いて覚える話し方 日本語生中継・中～上級編』くろしお出版
- 鈴木睦 (2007) 「言葉の男女差と日本語教育」『日本語教育』134号、pp. 48-57
- 高柳和子・遠藤裕子他 (1993) 『日本語会話中級 I』T I J 東京日本語研修所
- 田中共子・藤原武弘 (1992) 「在日留学生の対人行動上の困難—異文化適応を促進するための日本のソーシャル・スキルの検討—」『社会心理学研究』第7巻第2号、pp. 92-101
- 因京子 (2002) 「研究留学生を対象とする社会生活技能教育教材—専門日本語教育と並ぶもう一つの課題—」『韓日言語文化研究』第3巻、pp. 73-93
- 因京子 (2003) 「マンガに見るジェンダー表現の機能」『日本語とジェンダー』3、pp. 17-36
- 因京子 (2004a) 「ジェンダー表現の機能」河上誓作教授退官記念論文集刊行会 (編) 『言葉のからくり—河上誓作教授退官記念論文集』英宝社、pp. 773-785
- 因京子 (2004b) 「マンガ読解に見る韓国人学習者の日本語理解」『韓日言語文化研究』第5巻、pp. 63-88

- 因京子 (2005a) 「日本語学習者の日本語会話解釈上の問題点ー日本語学習者によるマンガ理解を通してー」 『比較社会文化』 第 11 卷、pp. 83-92
- 因京子 (2005b) 「女性語のゆくえー絆として鎧としての女性語の可能性」 『言語文化叢書』 15、pp. 30-45
- 因京子 (2006) 「談話ストラテジーとしてのジェンダー標示形式」 『日本語とジェンダー』 ひつじ書房、pp. 53-72
- 中島悦子 (1997) 「疑問表現の様相」 現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』 ひつじ書房、pp. 59-82
- 三宅和子 (2004) 「日本語の世界を探索する (三) ー日本語の男女差を考えるー」 『東洋』 第 41 卷第 1 号、pp. 294-297
- 山内博之 (2000) 『ロールプレイで学ぶ 中級から上級への日本語会話』 アルク
- 横田雅弘 (1991) 「留学生と日本人学生の親密化に関する研究」 『異文化間教育』 5、pp. 81-97
- Brown, Penelope and Stephan C. Levinson (1987) *Politeness: Some Universals in Language Use*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Leech, Geoffrey (1983) *Principles of Pragmatics*. Longman.
- Miura, Akira and Naomi Hanaoka McGloin (1994) *AN INTEGRATED APPROACH TO INTERMEDIATE JAPANESE*. The Japan Times.
(九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程)